



暗黒の欠片



vol.4

旧友

奇怪伯爵

った。

次第に、Nへの興味を募らせた私は、彼と友人になろうと思った。
当然、彼から交流を求めてくる可能性は皆無で、自らが行動に出る必要があった。
幸いにも、私は少なからず読書には自信があった。
Nには敵わないかもしれないが、他のクラスメイトよりは知識があると自負したのだ。

夏休みを目前に控えたある日、私はNに話かけたのだ。
何を読んでいるのか？
それが最初の言葉だったことを、今でも鮮明に覚えている。
質問に対し、彼がどういう表情をとったかは定かではない。
肯定とも否定とも取れぬ表情だったように思う。
笑うでもなく、煙たがる訳でもない。
ただ自然と、彼はその本の題名を口にした。
それが何であったか？
残念ながら、私には記憶が残っていない。
ただ、私の全く知らぬ題名であり、また著者であったことは間違いない。
そして、会話はそこで終わってしまったのだ。

Nと初めて口を利いたことに、変わりはない。
きっかけは、出来たのだ。
明日はNから話しかけてくるかもしれない。
彼だって、機会を必要としていたのではないか。
それを私が作ったのだから、垣根は取っ払われたも同然だ。
少しばかりの自己満足に陥った私は、翌日からNのコンタクトを待った。
一時限目の終了時。
二時限目の終了時。
しかし、彼は相変わらず本を読んでいる。
勝負は、昼休みに及んだ。
ところが、一向に彼が動く気配はない。
視線を、こちらに向けることもなかった。

放課後を迎え、一人で帰っていくNの背中を見て、私は悟った。

Nは、本当に友人を必要としていない。

いや、必要としているのかもしれないが、少なくともこのクラスにその資格を持つものはいない。

彼の振舞は、私の常識から見事に外れていた。

孤立しないよう仲間を作り、一種の安全を確保する。

集団に属し、その中で自分の位置を保つ。

漠然と感じていた摂理は、Nには当てはまらなかった。

私からみれば、これは相当に危険な生き方だった。

それは、自分に対する自信の無さを物語っている。

孤立しても集団と対峙できる能力は、私には持ち合わせなかった。

それをできるのは、腕力に優れたものか、知能に優れたものか、絶対的なカリスマの持ち主であらう。

自分とは、あまりにかけ離れた存在だ。

夏休みをはさみ、九月に登校すると、Nの様子が少し変わっていた。

読書を止め、ひたすらに何かをノートに書いている。

この変化が多いに気になり、私は再度Nに話しかけた。

今度は、少しばかり肝が据わったようだ。

Nの淡白な反応を予測しながらも、私は質問を浴びせた。

Nは以外とすんなり言葉を返す。

小説を書いている。

Nの言葉は、衝撃的だった。

それまでの自分には、本は読むものであり、書くという考えは及ばなかった。

物書きは、学生の分際でやるようなものではない。

今思えば、それが誤った認識だと気付くが、当時は本気でそう考えていた。

この驚きは、私に強く響いた。

Nの言葉を反芻し、次第にそれが自分の中に浸透してくるのが分かった。

小説を書く。

確かに紙と鉛筆があれば、誰にも可能なことだ。

とりあえず、紙と鉛筆を用意してみる。

主人公を考えてみたり、設定を考えてみたり。

結局、その頃は短編一つとして、形にはならなかった。

しかし、創作に対しての意識が芽生えたのは確かだ。

何もわからないまま、その想いだけが難破船のように揺らいでいた。

自分の創作が暗礁に乗り上げると、気になるのはNの小説だった。

相変わらず、彼の方から話しかけてくることは皆無だ。

友人と呼べる仲に至っていないことは、自覚していた。

しかし、それ以上にNの小説の内容が気になった。

同じ学生の身で、私とどれほど差があるものなのか。

原稿用紙五枚で止まってしまう自分。

Nは何枚書くことができるのだろうか？

日増しに想いは強くなり、遂に私は我慢が出来なくなった。

Nの小説を読ませてほしい。

ストレートに頼んだ。

さすがに彼は当惑の表情を浮かべ、恥ずかしいからという理由でそれを拒んだ。

結局、Nとの仲はそれ以上進展をみせず、高校卒業後の彼の消息すら知ることはなかった。

無論、彼の小説を読むことも、一度も叶ってはいない。

小説という言葉が気にかかっていた私は、大学に進学すると読書サークルの門を叩いた。しかし、この頃には創作への興味が薄れ始め、二、三の短編を残したに過ぎない。他に創作するメンバーも居るには居たが、Nから受けた衝撃以上の刺激は得られなかった。

世間一般の大学生イメージをそのまま自分に写し、いつの間にか就職活動を迎えたのは四年生の春。

目立つ成績もなく、どちらかといえば内向的な自分には、頭の痛い問題だった。

なりたい職業はあったが、それは現実とマッチしていなかった。

とりあえず、そこそこに名の知れた会社に入れれば良い。

情熱を持ったライバルを横目に、私はどこか冷めた想いで活動を続けた。

結局、大学の専攻に関連する業種しか門戸は開かれなかった。

それに強い不満を持つでもなく、新たな希望に燃えるでもなく、こうして私は社会への一歩を踏み出した。

社会生活は、予想以上に労苦が絶えなかった。

漠然と聞いてはいたが、全般的に多忙な業種を選んでしまったらしい。

趣味は全て仕事で忙殺され、執筆しようという気力はすでに喪失していた。

嫌悪すら覚えながらも、次第に染まっていく社会生活。

諦めと引き換えに手にした平凡な生活。

それを漸く受け入れられるようになった頃、高校時代の同窓会の誘いがあった。

それまでも数回、開催されていたらしいが、地元を離れていた私にとっては初めての報せであった。

私が遠方にいるため、誘っても参加しないと歴代の幹事に思われたらしい。

今回の幹事は随分と律儀で、そのお蔭で報せが私のもとに届いたのだった。

たまたま実家への所用もあって、私は参加を決め込んでいた。

同窓会は、地元の居酒屋で慎ましく開催された。

卒業から既にかかなりの年月を経ており、参加者も年々減少傾向のようだった。

参加者が少ないながらも、酒が進むにつれて、それなりに会は盛り上がりを見せた。

残念ながら、その場にNの姿はなかったが、私はどうしてもその話題に触れたかった。

Nの近況が、気になったからだ。

Nの名前を出すと、友人たちの顔に微妙な曇りが生じた。

多少の戸惑いがあったが、構わず話を進めた。

Nは、どうしてる？

その質問に答える者はいない。

皆がきょとんとして、質問の意味すら理解していないようだった。

私は、Nの印象が薄かったことを思い出した。

当時の彼を思い返せば、無理もないことだった。

しかし、存在すら忘れ去られるとは、あんまりではないか？

私はどうにか皆にNを思い出させようと、できる限りの記憶を口にした。

むきになった私を制止させたのは、級友の言葉だった。

Nって、誰？

冗談かと思ったが、どうやら本気らしいことが窺えた。

他の者も、Nの存在を否定する。

私は、皆に担がれているのではないか？

そのような疑問すら浮かんだが、一向に種明かしの瞬間は訪れなかった。

私は、それっきり口をつぐんだ。

居酒屋を出て、実家への道を一人で歩いた。

それほどに酔っているとも思えない。

彼らとの会話も、ほとんど記憶している。

何故、彼らはNを思い出さないのか。

自分の記憶違いだろうか。

誰かが言ったが、学年を間違えて覚えていたのだろうか？

しかし、私には確固たる自信があった。

Nの影響は、私にとって多大だ。

彼から受けたインパクトは、私自身が何よりも覚えている。

そのような重大なことを、誤って記憶するはずがない。

しかし.....。

実家に戻ると、取りも直さず昔のアルバムを引っ張り出した。

埃の被った分厚い卒業アルバム。

私は、祈るような気持ちでページを捲った。

クラス別の写真。

一人一人がセパレートされた写真が載っていて、その下に氏名の記載があった。

写真には、先ほど再会を果たした友人達の顔も当然に載っており、変わっていないと思われた顔も実は時間の経過を如実に表していた。

一通り眺め、私の背筋を戦慄が奔った。

Nが、いない。

これは、どういうことだ。

友人達の言葉が、正しかったということか？

そんなはずは……。

私はもう一度クラスの写真を見直し、見落としがなかったか確かめた。

次に、他のクラスの写真も片っ端からチェックした。

酔いなど、一気に醒めていた。

受け入れがたい現実が雪崩のように押し寄せてくる。

私は、それを必死に喰いとめようと、写真を凝視した。

ようやく、一枚の写真を発見できた。

自分の所属したクラスの集合写真。

おそらく、キャンプの時のものだ。

大半がジャージ姿で写っている。

背景には、森があった。

確か、班別になってカレーを作ったように記憶している。

仲の良かったKや、密かに想いを寄せていたY子の顔もあった。

そして、左の隅で薪を掲げた自分。

視線は、カメラを向いている。

その私の背後に写るのは、果たして私が記憶するNの横顔だった。

やはり、Nは存在している。

私は安堵のため息をついた。

しかし、新たな疑問が湧きあがる。

何故、彼の個別写真が載っていないのだろう？

翌日は、体調が優れなかった。
酒が残っているせいか、頭も重い。
午前中は布団に寝そべり、自宅へは夜に到着するように実家を出発した。
東京駅へ向かうため、まずはローカル線に乗る。
不快だった暑さも、車内の冷房で解消された。
睡魔に襲われ、ウトウトしていると、懐かしい駅名が耳に入ってきた。
来る時は夜だったため、端から駅の情景などは気にしない。
しかし、薄暮の中に消えつつある光景は、私の記憶を刺激した。
高校時代の三年間、この駅で乗降したのだ。
毎日のように利用した駅が、今は単なる通過駅と化している。
駅前のパン屋で買い食いし、書店で漫画を買った記憶が蘇る。
車窓から見える景色は、何ら変わっていないように思えた。

私は視線を正面に戻す。
ここから乗換駅までは、まだ随分とある。
ひと眠りしようかと思ったところ、私の思考は停止した。
窓の向こうには、反対側のホームが見える。
ほのかなライトが点灯し、弱い光のその下にベンチが照らし出されていた。
そこに、見覚えのある顔があった。
心臓が、どきんと音を立てる。
私が昨夜、必死になって探した写真。
そう、ベンチの男はNだった。

見間違うはずはない。
Nは、私の記憶どおりの容姿を忠実に保っていた。
まだ私のことに気付いていない。
今にも大声で叫びそうになったが、昨夜の出来事が引っ掛かった。
Nって、誰？
友人の言葉が、連呼される。
私は、記憶に対する自信を少なからず失っていた。
現に、卒業アルバムにNの名は無かった。
存在したのは、私の背後に写る写真一枚だけ。
その事実が、私を躊躇させた。

心のなかで、Nがこちらに気付くように念じた。

視線にありったけの念を込めて、彼を凝視した。
その想いが通じたのか、ようやくNは視線をこちらに向けた。
既に列車は発車のベルを鳴らし、ドアの開閉音が聞こえた。
ゆっくりと動き出す列車。
Nの姿が後ろへと流れていく。
その時、私は見た。
Nの口元が微かに動くのを。
間違いなかった。あれはNだ。
彼は私を認識し、笑みを作ったのだ。
それに、どのような意味が込められていたのだろうか？
Nは、今でもあの駅を利用しているのでしょうか？
様々な疑問が湧き立つ。
だが、とりあえずNという存在が明らかになった。
私の記憶違いなどではなかった。
素直にその事実にあぐら、私は爽快な気分で帰途についた。

この時、私の思考は麻痺していたのかもしれない。
何故、注意が逸れてしまったのだろう。
ここに、大きな違和感が存在していたことを見落としてしまった。
それはNの容姿が当時のままだったということだ。
髪型すら変わっていなかったのではないか？
まるで、写真からそのまま抜け出してきたように。
何故、あのとききちんと確かめなかったのだろう。
後になって、そのことが妙に気になった。
結局、以来Nを見かけることはなかった。

もし、Nと再会したら？
そのようなことを考える時がある。
話したいことは、山ほどある。
当時、知りたかったこと。
Nの人生観。
今は、何をどのような暮らしをしているのか。
今でも小説を書いている？
相変わらず、友人は作らない主義？

そして、何より彼の作品が読みたかった。
そこに、彼の考えていることが書かれているはずだ。

Nの感性を知るには、それしか方法がないような気がする。

ばったりと再会したところで、Nが懐かしさから饒舌になるとも思えない。

相変わらず、Nは何も話さないかもしれない。

そう、その方が現実的だ。

たぶん、Nは何も語らない。

彼を知るには、彼の小説を読むことでしか理解できない。

私は、Nへの想いをそう結論づけた。

違和感を持つようになったのは、おそらくNを目撃した後からだ。
心臓の鼓動が妙に明確に感じられ、得体の知れぬ不安感に駆られることがある。
思考は停止し、現実世界が遠ざかっていく。
現実世界を映画のスクリーン内に見る感覚だ。

初めてそれを感じたのは、雨上がりの午後だった。
雨宿りのつもりで寄った喫茶店を出ると、何とはなしに引かれる方角があった。
見知らぬ道を少し歩くと、かなり急な坂道が現れた。
このような坂道があったなんて。
小さな発見に喜んで、ゆっくりとその坂を上った。
差すような視線を感じその正体を探ると、それは坂上の家の2階窓にあった。

窓際に佇む中年女性。
遠目に見ても、不機嫌そうだった。
その瞳に、強い感情が込められているような気がする。
その圧力に耐え切れず、私は視線を外す。
その直後、脳裏を不整然なイメージが掠めた。
怒り。
悲しみ。
少女。
扉。
ランドセル。
物置。
錆びたナイフ。
縄。
それが、一つの物語を構成することはない。
しかし、その家から放出された、まるで腐臭のような禍々しさを、私は肌で感じていた。

坂を上り、その家の前に立つ。
驚いたのは、『売家』の看板。
不動産屋の名称と、連絡先の記載が書かれていた。
もう一度、窓を見上げる。
そこに、先の女性の姿はなかった。
すでにカーテンは除かれ、黒い穴のような窓だけが見える。

ガラスの向こうに、私が踏み入ってはならぬ世界があるような気がした。

また、ある秋の夕暮れ、帰宅途中に遭遇した現象も、説明のつかないものだった。

神社傍の、幅の狭い道で、犬を連れた老女と出くわした。

私は車道にはみ出て、老女に道を譲った。

犬が苦手で、咬まれる不安を感じてしまう私は、当然のごとく犬に注意を向ける。

白い小さな犬が、私の横をすり抜けた。

続いて老女が過ぎたのを確認し、私はまた歩道に戻った。

不意に、すぐ後ろで言葉が聞こえる。

老女が発した言葉であることは分かったが、その意味が聞き取れない。

そして、老女は私の背後まで迫り、後をつけてきた。

その間も、言葉は続いた。

どうやら、日本語ではない。

もちろん、英語でもハングル語でも中国語もない。

私の知らぬ奇妙な音が、そこに含まれている。

気配から、老女はあと数センチのところまで迫っているのが分かった。

私は恐怖を感じ、駆け足でその場を去った。

あまりの怖ろしさに、私は一度も振り返ることはなかった。

数十メートル先に通夜の家を目撃したが、あの老女と関連があるのかどうかは確認できなかった。

ただ、庭先に先ほどと似た白い犬が繋がれていた。

もともと、靈感などとは無縁の私だった。

幽霊を見たことなど一度もないし、親族にすらそういう能力を持つものはいない。

疑いはしつつも、私が靈感を持ったというのは何とも怪しい。

自分自身ですら、懐疑的なものだから。

では、これらのケースはどう説明できるのだろうか？

きっかけが、分からない。

密かに感じることは、あの日Nの姿を目撃したことに関連があるのではないかということだ。

しかし、Nを見たからといって、それが私に変化を及ぼすとは考えられない。

最近では、こう考えることもある。

私自身には、何の能力的変化は起きていない。

時に目にする違和感は、誰かに見せられているのではないか。

その誰かとは、当然Nである。

しかし、それはNが人外の存在だ認めるようなものだ。

そうであれば、私が全てを知る日は来ないかもしれない。

人生とは、不思議なものだ。

今、私はこうやって文章を綴り、インターネットという手段によって、それを見知らぬ方に読んでもらっている。

それらは、『暗黒の欠片』と題された怪奇小説だ。

高校時代から受けたNの影響が、私に成果をもたらした。

その題材は、現世とあの世の違和感であり、人知の及ばぬ世界である。

全ての要素は、Nによって影響を受けたものであり、Nの存在がなければ誕生しなかつたらう。

Nが実在したという証明は、私にはできない。

いや、かろうじて私の背後に写る1枚の写真だけが、そのことを証明できるかもしれない。

ただ、最近是我の中でもNに対する見方が変化してきた。

頻繁に目撃するようになった怪異が、Nへの怖れに変化しているからだ。

Nは、何者なのか。

Nが私に見せる世界の意味は？

時にふと頭をよぎることがある。

あの時、Nが書いていた小説。

読むことの叶わなかった、その内容。

実は、あれこそ『暗黒の欠片』だったのではないだろうか。

暗黒の欠片 vol.4 旧友

<http://p.booklog.jp/book/47205>

著者：奇怪伯爵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kkaiki0710/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47205>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47205>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.